癖ありこれを以菅江の字といふ當下此の字を看版に
書て菅江鮓これ江煎餅と号て賣しあり六十一
歳のとき剃髪せんとて產神市谷八幡宮へ願ひ詣て
ふ詣て
はつさくのはちまちはつ男山にまつる身をかへ家
寛政の末七十歳ばかりにて終る青山繁國山青源寺と云
る禪寺にて葬る碑の文字菅江自筆にて書りしも厳し
○狂哥坊主
安永天明のころ江戸四谷天龍寺門前に狂哥坊主といふ
もの有りて原も豪家の子なりしかども利欲に迷ける

事とき〳〵ひ家を棄て竟に乞食となり躬とあり這こゝに小
さき小家を借て住し日毎人家の簷ふしもして一銭をこひ
あつ〳〵其一銭とり〳〵時に狂哥一首をよむ世人これを狂
哥坊主といふ詠哥のつゞきもをり〳〵其ころ目黒日紋谷と
いへる處に一寺の仁王殊のほか流行して諸人立願ふる
者も効驗いちじるしくして賽詣群集して夜も
こゝろをして通夜する者いと多かり或人狂哥坊主ふるの日
紋谷の仁王を題して詠べしと云ふ人あらば取あへず
日もんやの仁王さんとも云つゝぢやおぢがこゝろふぞ行
當下堀の内むら妙法寺の祖師堂これはゝ大いふ繁昌ふ

日毎叅詣あるる間あり〜或人是を題して詠べし〜と云て
べ取敢ず

堀の内日蓮大がさつま芋洛るひと山さんもん法ちら

亦或人五歳ふある男子の祝せんとて衣服等美々しく縫
せ准備てじ〜整ひ翌る霜月十五日ゆう產神へ叅詣
さもべしと楽て寐らしが次の朝かの男子と〜起て外面
いでるが忽ちひとつの包袱を拾ひ来まう父その包袱をとりて
披て見まゞ裡ふ袈裟し法衣と數珠とあり父大いふ氣色を損じ
今日祝して神社へまうでんとるふ斯るいまし〜物を拾ひ
来て〜事はかりじ快ようとびとして當日の叅詣も止ん〜

酒うち喫て臥居たり時節門口へおりたちこの狂哥坊主を
待ふとゝひ来りる主人此声を聞とひたすらに走り出狂
哥坊主をよびて曰く我今日男子ゞ祝ふ産神へ詣させん
と思しふ計ぞも今朝この子外面ふいぞ袈裟と法衣
と數珠をひろひ来りぬ我もありぐ心持よりぬ万望祝て
めぐりうき狂哥一首よりて贈り云ふ狂哥坊主の
辞とも為るべし

けさひろふこゝろも霜月十五日ちゝ子のとしも數珠のかざわど

詠ゝ家主大いふ惟び銭ゆゝ仮しゝ
都て皆斯のごとく何ふ題を聞ゝ其声ふ応じて

詠ゝ達吟あり一首一銭ふ換ぶ銭八百文ふ
ゝ狂哥八百首と詠あり夕暮家ふ皈ぶ銭
ふゝの食物と買て此の住ゝ老人ゝ幼稚
のあぐふ分ちあゝ飡しむゝゝ吝惜の心あり今
日貫し銭ゝて貯蓋ゝ事あり次の日ゝ亦ゝ起
いぐ狂哥ゝて実家へかゝて元の貫人
ふあゝて諫勧人もあゝぐ等盤ゝ高ひのふ
懸直とひて人と嘆く罪人の死為ゝゝあり三十一字
一銭ふうて世とわるゝて楽ゝて生涯ゝ終
ゝ世人ゝひゝの哥と蜀山の哥ゝ慎あり

○市川栢莚

下総の國幡谷村といふる處の農家堀越十藏といひし者耕奴の業を嫌ひ俠客ふてかつて我家ハ第ふゆづりく万治三年の春江戸ふ出て和泉町ふ住ハ一子と生下て海老藏といふ這子妓藝ふさ〳〵俳優を好むふよりて妓家ふ入て市川團十郎とあづく父の勇氣とうけく荒夏といふ夏の道とひしれ紅粉とのりく遍身とりこどり三舛の鍔の大太刀もれ小き日の丸の扇とりてり當時まで八狂言一幕つけるものありしと時代の続ハ狂言ふ立しふ這者よりで始うる戯場藝中の大祖と称ひべし浪華推本才唐第

子ふありて俳名才牛といひり栢莚ふ其子ありり幼名を九藏とよび藝ハ勿論親ふ比べ幼年より俳諧とあのく普子其角ゞ膝ふのゞりて三舛と号こ元録十年十歳ふく初舞臺とつくあり十七歳の秋二代市川團十郎とあり表德を栢莚と号しくり妓藝みく人を悦ぶ事計ふいくるいく東武ふてりてもやハ五月の鍔ゞ太刀三舛の鍔と用ひ或ハ團十郎藍ゞゞれ亦ゞ團十郎艾唐錦の苍ふ三舛とゆり入くゞと思ふ其名異國の機婦ふ人閑ふしりゆる遠ハ國の嬰兒ふで團十郎とせもとひく手を挙て口とひらく事とあハ栢莚妓藝の

いとまなく俳諧狂哥の類ひとりゝ〳〵いとび月は夕苔の調風雅とのゞる事いと多し錦著て毎朝の上は乞食なりとりふ句と作しも這拓蓮あり今の歌舞妓役者のごゝ其躰いやしゝとも顧ば十分高慢世の人と直下ふ者あり あゞゝ見ぐるふ意憎〳〵思ふゝあり拓蓮ハ其身を是ぐゝ諸位の客人と尊敬しいゝゝうも醜觸ゝゝゝ穏和ふして風流ゝゝ実ふ當下の一畸人ふゝあり

○窓村竹

ゝゝど栢蓮ゞ変ゝゝ戯場の書ふゝゝゝゝゝゝが爰ふ暑ハ東武青山熊野横町ふ窓の村竹といふる老人在ゝゝ氏と

多田とゝひ名と敏包俗称千次郎別号と青嵎堂と呼ク
其父ゝ止事あれ御許ふけうへ者あるゝ不幸ふし
て浪人し両親ゝ早く死し千次郎孤獨の躬ゝあり
這かゝこさゝなひあれしゞ或商人の慫慂ふをつゝ
やゝふ成長つひに俚き野菜商人ゝあれゝ
幼年ゝ書と見る事と好のあり一日商ひしいゝ
ゝ利徳とゝゝれハ且當日の米と買残ゝ銭ハ私ゝ
貯蓋ゝれ書と求めゝ見とゝむ責ふ一日清ゝある衣服着
事ゝ家ハ破ゝゝぶれゝゝ厭ひ三十の頃ゝ妻
ともむゝ子も生下ゝあれども皆汚ゝやゝゝる衣服

着下おきゝ僅ふ寒とものゝ且夕ゝ食事も米ゝ欠
と食ゝる時ゝ美味野菜魚肉のゝひと食ゝ
変ゝ毎ゝ是飢とものゝゝ幸ゝて求る書も數年
つゝとゝ貧ゝゝひ書とゝて五十路と
ゝえてゝ這千次郎ゝ学才ある事と忽ち名高
きゝとゝゝ常ゝ雑俳と好て是の撰し敷島の
道ふゝ一日堪忍と云る一題ふゝ且ゝ夕ふゝ
時ゝ六時の間ふ百首の哥と詠堪忍百首ゝ云る書と編
我の後遍ふゝ別ふ一首の道歌とゝけ
堪忍ゝて其跡のゝけゝと見よ人の世ゝ中

家もいとゝ貧くくらし　住地方も避地あり小き窓外
ゆゆしう女竹のまぐりうゝと眼的として衆人ゝひ来
るゆゑに戯名窓のむら竹の前とよべり個し鶯きゝす
ほどのむら竹といへる古歌をもちゝ貧学の事を
ほど十分ゝいとゝ雖もいとゝ奇しゝ行牧の
老人あり只管賞讃を朝ゝう草鞋ゝ竹篭
の裡に大根ゝう牛房ゝんじんその外種々野菜乃
ゝと入ゝ扨もて見ゝとゝ麻布竜土町六本木へん
ゝで商ひゝゝ諸人その行ひと和ゝうをもて何に
と這老人が来ゝと待ゝおの野菜のゝゝひを求るゆゑ

午時も過さて賣さて家に歸るかくさまやうく案上に
向ひ書をよむ外又事あり後に門人あまた来りてき
て庵中にくひ来るより若干あり麻布六本木に何がし候
の御隠居御別業にはくけるゞ村竹ゞ異なる行ひと関と
きれとりく宜て扨談話の友とせくれるり是よりのよ
つに名高くありぬ社中の人々村竹ゞ野菜と擔ひうりあり
く事と恥て是と廃なくと止まゞも聽ゞ爰に青山より麻
布へうりに處に足軽町とりくるとゝ後あり這々何がし候の
御官第舍裡あるゞも麻布への間道あるゞより人助の為に
して昏のく這と通るゝ支ありきゝゞ列候旗本うと

も這處と通るくゝゝゝ鎗とうせくゝ通る支あり一時村竹例
のとうり野菜とうのひて麻布邊へ商ひに行午時ゞ後賣さて
くかくりに這足軽町とうりうるゞ當日六月廿四日に愛
宕山四万六千日とうくる日にくゝ糸詣人ゞくゞ然て
この足軽町も住ようく住来茂くゝ殊に大暑にてのとく
熱気人とむに村竹菅の小笠をうゞ扨うくげく啓うる
向のかくとうり小濵何がくゝのと申ひやん事あれ御方供
奉士十餘人引つゞ例の通鎗とうせくゝ来るる村竹遥
にくゝと看著この小濵氏をとうくゝうゞ家に来り
に御方あるに今かく扨かくげ草鞋を紐くる侍う

遇ん事見るゝと思ひもよらず不計かゝる御藩中
の門内へふげうの梅の樹のもげりする間ふ隠れ侍り
居や然ふ這家のあるじ是と看つけ大ふ驚き怒七ツ六尺
棒をひき提んで出你何奴あもび呼内りもび裡ふいりて
かゝ樹の下ふ屈まるぞ察るに盗人あるべし打殺
んと敲囲て彼六尺棒ふ村竹はぐるき飛
たるを小老ら日毎這方ると過ぎ高ひのゝ者ふて侍
當今御門前ふ知己ふあひ餘ぎ看苦き体ふてそ
へば計ば御門裡へうけ入隠れたるひに万望ら罪をゆん
有べゝ只管ふひ言ゝもども主人一向ふ聽

猶とび蒐つゝ打んとに村竹今いるかゝ
籠ゝに扯拏あげゝ門外へうけ出ゝ主人ハ猶も見たり
んと追うけゝ門とりつるむゝ竹狼狽走んとする時の
小濵何ぐゝに往合かず看合せる小濵氏丹後ひ
らに袴ふ黒紹のかゝ衣着ら急ふ殿中ふ笠とぬぐれ村竹
ふむこのひ腰うちかゞめ先生這方ゝ多えて御無音ら
もび待ひき今日ゆん活業りゝや御返ぎに待ちや小姓
も帰路ふちかあゝび御菴中へゆん訪問ゝに心得ふく
侍ふとのふ村竹大地ふ両手をつに言語へうゝりて何
ゝ御答ゝ此ゝに村竹と追蒐りゝ

這家のあるじ六尺棒を揚げ人叮嚀に接礼せるを看て流石に手も下し得ず
うつあけ〳〵棒のて法人面目をげに看ゑる途中
ひ大暑あるべし小濵氏も言みじ〳〵に接礼とり別辞を
ちげて東方へ去るる村行法〳〵彼主人の前に両手
をつきそ〳〵と無礼なり〳〵と支と詫主人もいと去し
人は先生と云〳〵詞耳に残りて是よりも強て賢く這后よ
く心得よ〳〵云〳〵門内へ去りそれより村行衣服の砂
ちはらひ杖擔てかへらんと做るるれ亦一人の男愛宕
詣と見るる〳〵来かるを先生〳〵御ちはひあるれ〳〵と